H27 年 12 月　新聞記事（山陰中央新報）

街角トピックス

松江

◆乳幼児のスマホ使用控えて　松江市内の医師や大学教授ら有識者でつくる「子どもとメディア対策協議会」（会長・田草雄一ぽよぽよクリニック院長、19人）が、乳幼児のスマートフォン使用を控えるよう呼び掛けるポスターを作った＝写真。市内の小中学校や公民館など約200施設に配布する。

同協議会は、市教育委員会の呼び掛けで昨年5月に発足。電子メディアと子どもの関わりをテーマにした講演会を開いている。

ポスターは縦42㌢、横30㌢で、県立大短期大学部保育学科の学生の作品を基にデザインした。スマートフォンに触れる乳幼児の写真に「3歳まではスマホにさわらせないで！」とのキャッチコピーを記載した。

田草会長(50)は「0～3歳時に育まれる親子の信頼関係が阻害される可能性がある。便利さだけでなく、悪影響について考えてほしい」と話した。（佐々木一全）

安来

◆囲碁の腕前23人競う　安来市総合文化祭・囲碁大会（日本棋院安来支部主催）がこのほど、同市安来町の安来中央交流センターであり、同市や出雲市、大田市などから23人が出場し熱戦を展開した。4段以上によるA級では、石川泰章6段(62)＝安来市下坂田町＝が優勝した。（安東秀博）

このほかの上位成績は次の皆さん。

▽A級　②釜世昭一（大田市）③大野勝則（出雲市）▽B級（2～4段）①山口紀輝（安来市）②遠藤栄一（米子市）③和田昭（松江市）▽C級（初段以下）①布野宏定（出雲市）②鴨木収生（安来市）③高木宏一（同）

平成 27 年 12 月 1 日付け・山陰中央新報

アイルランドでイベント
「八雲 正式評価された」
小泉凡さん 松江市長に成果報告

アイルランドでの顕彰イベントについて報告する小泉凡さん（右）と祥子さん

松江ゆかりの文豪・小泉八雲が幼少期を過ごしたアイルランドで10月、初めて開催された八雲顕彰イベントに参加した、八雲のひ孫の小泉凡さん(54)らが30日、松江市末次町の松江市役所で、松浦正敬市長に事業内容や現地の反響を報告した。

凡さんと妻の祥子さん(55)、訪問団の団長を務めた山陰日本アイルランド協会の内藤守会長(78)、副団長の小林祥泰前島根大学長(69)の4人が訪れ、写真を見せながら、8日間の滞在を振り返った。

首都ダブリンでは、八雲の生い立ちや功績を紹介する展覧会を実施。会場には、松江から出品したペンや草稿が並べられ、祥子さんは「現地の協力で、やっと八雲は里帰りできた」と話した。

ダブリンなど3都市で行われた、共に松江市出身の俳優佐野史郎さん(60)と、ギタリスト山本恭司さん(59)による朗読パフォーマンスでは、拍手喝采が起き、八雲作品を受け入れてもらえたと実感したという。

凡さんは「八雲がアイルランドで正式に評価された」と成果を報告。松浦市長は「さらなる交流を願う」と期待した。（石川麻衣）

平成 27 年 12 月 1 日付け・山陰中央新報

ゲゲゲの遺産

追悼・水木しげるさん

＜中＞

妖怪の教え

人間を戒め謙虚さ説く

「木や虫のように、人間も自然と一体となって生きていかないといけない」。水木しげるさんと20年来の交流がある島根県立大短期大学部（松江市浜乃木7丁目）の小泉凡教授(54)＝民俗学＝は、水木さんが常々語っていた、人間に謙虚さを求める言葉を思い起こしている。

最初に会ったときは、島根県内で霊気漂う寺社などを巡った。最後となったのは島根半島などを訪ねるテレビ番組収録に同行した今年7月。松江市八雲町西岩坂の志多備神社では、ご神木の巨大なスダジイをじっと眺めていた姿が忘れられない。「水木さんには超自然的な何かが見えていたんだろう」

水木さんを魅了した妖怪は、昔からの伝承や民間信仰に頻繁に登場する。

テレビ番組の収録に臨む水木しげるさん（左）と小泉凡教授＝2015年7月2日、松江市美保関町内

小泉教授によると、古来、ある妖怪に、恐怖や不安と同時に憧れも持った。妖怪は人間を戒め、謙虚さを教える存在でもあったという。

明治以降の近代化、戦後の高度経済成長などに伴い、自然や目に見えないものへの畏怖が失われていく中で、妖怪漫画を描き続けた水木さん。「妖怪を通じて、人間と自然との関わり方を提示した」と小泉教授はみる。

姿形を漫画で表現

水木プロダクションで資料整理などに携わった漫画評論家の呉智英（くれともふさ）さん(69)は、水木さん以降「妖怪が漫画やテレビに取り上げられ、さらには地域の観光資源としても扱われ、一定の地位を得るようになった」と、妖怪文化を普及させた功績を強調する。

江戸時代の妖怪画や民俗学者柳田国男の著書「妖怪談義」を下地に、漫画の妖怪を描く一方、絵のない妖怪については、自らの想像力と知識によってオリジナルを描き出したという。呉さんは「知られていなかった妖怪の姿形を、漫画という媒体で、身近な存在として世に広めたプロモーターだった」と評した。

水木さんが漫画家として活動し始めた当時、手塚治虫さんの「鉄腕アトム」など、科学技術や正義の味方を題材にした漫画が人気を集めていた。そんな中で、暗い主人公の鬼太郎や異形の者たちが異彩を放ち、妖怪ブームを巻き起こした。

3年間にわたり、水木さんを密着取材し、評伝にまとめたノンフィクション作家の足立倫行さん(67)＝境港市出身＝は「漫画で新しい価値観を生み出したのは、紛れもなく水木さんの功績。現代の漫画表現の多様化にもつながった」と力を込める。

幅広い世代に浸透

今や妖怪文化はすっかり浸透し、子どもを中心に幅広い世代がアニメやゲームで妖怪に親しむ。民俗学の専門家だけでなく、さまざまな人が妖怪に興味を持ち、学んでいる。

小泉教授も島根県立大短期大学部で6年前から「妖怪学」の講義を開き、100人以上の学生と妖怪の由来や、その裏に隠された日本人の精神性を考察する。「水木さんの遺志を継ぎ、次の世代に妖怪の面白さを伝えていきたい」。自然の一部である人間としての謙虚さを忘れないために。

（24、26面に関連記事）

楽しみながら「食」学ぶ

ゲームや料理体験 食育まつりに5000人

県立大短期大学部の学生が手作りした「食育ボードゲーム」を楽しむ子ども

松江

食の大切さを伝える「しまね食育まつりinまつえ」がこのほど、松江市学園南1丁目のくにびきメッセであり、親子連れ約5千人が料理体験やゲーム、県産食材の販売などを通じて安心、安全な食への意識を高めた。

県と県教育委員会、県食育・食の安全推進協議会が、食育を推進するため毎年開いている。今年は連合島根の「地SUN地SHOW祭り」と同時開催した。

子どもには、調理師直伝のだし巻き玉子作りや、普段の食事のカロリーを計算する食事バランス診断などの体験コーナーが人気。楽しみながら野菜や栄養素を学べるよう、県立大短期大学部健康栄養学科の学生が企画、手作りしたすごろく「食育ボードゲーム」も満喫した。

ボードゲームに挑戦した松江市立竹矢小学校4年の藤原妃奈さん(10)は「クイズがあって勉強になった。ご飯のときに思い出すと思う」と喜んでいた。

（増田枝里子）

平成27年12月4日付け・山陰中央新報

小泉八雲 育んだ国

アイルランド訪問記

～第5話～ 海の見える小泉八雲庭園

大叔母と訪れた保養地

＜川島典子＞

トラモアの小泉八雲庭園にある太鼓橋（筆者撮影）

妖精のような少女が、アイリッシュハープを弾いている。

今年6月に開園したウォーターフォード県トラモアの小泉八雲庭園で、八雲の血縁者に出会った。彼女の名前はソフィア・ウィズダム(17)＝写真。ハーンの叔母スーザンの子孫だ。ソフィアさんは、オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン・ツアーの一行を歓迎して、庭園の木立でハープを弾いてくれた。

ダブリンから南へ車で約2時間半のところにあるウォーターフォード県はクリスタルガラスで有名な県。トラモアは、今までガイドブックに掲載されていなかった。だが、八雲庭園がオープンしたことで、「地球の歩き方」の次回改訂版からは掲載される予定だという。

ところで、なぜトラモアに小泉八雲庭園がオープンしたのだろうか。

それは、トラモアが、大叔母のサラ・プレナンとともに八雲が保養に訪れたゆかりの地だからだ。八雲は、トラモアの海で泳ぎを覚えている。

彼は日本に来てからも、海水浴のできる海を探し続けた。東京帝大赴任後は、東海道線上の海を探している。最初は、静岡県浜松市舞阪で下車するが、気にいらない。

その後、浜松中学の先生をしていた松江中学時代の教え子・田村景久とともに同県焼津市に降り立った。

「トラモアの弓なりの海岸線や荒波の様子は焼津の海にそっくりです。八雲は焼津の海の荒波が気に入ったと聞いています」と言う焼津市小泉八雲顕彰会副会長の坪井れい子さん(72)。焼津にも、2007年に小泉八雲記念館がオープンした。小泉凡さん(54)が名誉館長を務めている。

焼津では、魚商人・山口乙吉の家の2階に逗留した八雲。焼津にて（『霊の日本』や『乙吉のたるまに』（日本雑記）などの焼津に関する作品も残している。

トラモアのコーストガード・カルチャー・センター裏から見える海を眺める小泉凡さん（筆者撮影）

八雲は、焼津を6回訪問。小泉凡さんの祖父にあたる長男・一雄に水泳を教えたりもした。

ツアーの一行は、10月9日、ウォーターフォード市庁舎で行われた歓迎レセプションに出席。熱烈に歓待された。内藤守団長(78)も、アイルランド民謡の「サリーガーデン」をオカリナで吹くなどして友好を深めた。

10日午前には、トラモアの小泉八雲庭園で、松江市が寄贈した八雲のレリーフ（2010年倉沢実作）の除幕式に臨んだ。

除幕式には、地元住民や地元の小学生など約250人が参加。ジョン・カミンズ市長(28)は「6月の開園以来、数千人の来園者があった。ハーンがアイルランドで新たに認識されるようになった証だ」と挨拶した。

その後、小泉凡さんの挨拶に続き、内藤守団長が松江市長のメッセージを代読した。

トラモアに小泉八雲庭園を造る計画が持ちあがったのは、2012年のことだ。「ラフカディオ・ハーン・ガーデンズ」代表のアグネス・エイルワードさんが中心となり、プロジェクトを進めた。庭師のマーティン・カレンズさん(37)が設計。地域雇用プログラム修了生らが造園している。

なだらかな丘に造られた庭園の総面積は、約1万平方㍍。庭園からは、八雲が愛したトラモアの海を見わたすことができる。海の色は、どことなく宍道湖に似ていた。白波のたつ海から吹く風が肌にここちよい。

庭園は、八雲がたどった人生にそって九つのエリアに分かれている。門をくぐってすぐのエリア「移行の庭」には、本州や四国、九州など日本の四つの島を表した石を配置。舗道の石畳は鯉の柄だ。

日本庭園や、太鼓橋があるエリアもある。だが、トラモアの小泉八雲庭園の特徴は、純和風の庭園だけでなく洋風の庭園も含まれていることにある。

例えば、生薬地「ギリシャの庭」には、地中海風の植物を植えていた。その他、「アメリカへの旅」「日本への到着」など八雲の人生のストーリーにちなんだエリアが続く。

6番目のエリア「せせらぎの庭」は、加賀の潟㌢に伝わる伝説などをイメージした庭だ。

八雲が好きな桜や、梅、松、もみじ、笹など、日本の植物もいたるところに植えてある。

同日午後は、トラモアのコーストガード・カルチャー・センターで中村茶舗（松江市天神町）の中村紗智子さん(27)、中村万紀子さん(25)が抹茶のお点前を披露するワークショップを開催。地元住民など約60人が参加し、実際に抹茶を点てて味わってもらった。

同センターでは、写真展「ラフィカディオ・ハーン～トラモアから松江へ～」も開催。八雲と家族の写真や、松江城、月照寺の亀、城山稲荷神社の狐㌢、稲佐の浜、出雲大社の巫女などの写真を展示している。

「孤独は松江で終わりをとげた」。天折したトラモアの詩人ショーン・ダンの詩の毛筆の書が、ひときわ目をひく。この一節は、庭園の案内板にも刻まれていた。

松江で家族を得た八雲は、父への複雑な想いを乗りこえ、故郷の海への憧憬を深めたのかもしれない。

（松江総合医療専門学校非常勤講師）

＝土曜日付で掲載＝

平成27年12月5日付け・山陰中央新報

八雲の魅力 朗読ライブで

13日、松江でイベント

俳優・佐野さんと ギタリスト・山本さん

朗読ライブへの思いを話す山本恭司さん

松江市出身の俳優佐野史郎さん(60)とギタリスト山本恭司さん(59)が、松江ゆかりの文豪・小泉八雲（1850～1904年）の魅力を伝える朗読ライブを、13日に同市西津田6丁目のプラバホールで開く。山本さんが同市殿町の山陰中央新報社をこのほど訪ね、「2人で八雲の素晴らしさを伝えたい」と語った。

2人は松江南高校の同級生で、八雲作品の朗読ライブを2007年から続ける。佐野さんが作品を読み、山本さんがギターで音楽や効果音を入れるスタイルで各地を巡り、昨年は八雲の故郷ギリシャで上演。今年10月には八雲が幼少期を過ごしたアイルランドで公演した。

アイルランドでの朗読は日本語だったが、観客の拍手は鳴りやまなかったといい、山本さんは「言葉が違ってもしっかり届いた」とうれしそう。帰国後初めての朗読ライブで、アイルランドについて八雲が記した文章や、江戸時代に和歌山で起きた津波にまつわる物語「生神（いきがみ）」などを披露する。

山本さんは「コミカルな話、怖い話、感動的な話などさまざまある。どれも魂を揺さぶられる作品だ」と来場を呼び掛ける。

「小泉八雲　朗読の夕べ　稀人（まれびと）」のタイトルで午後6時半開演。最初に、八雲のひ孫で島根県立大短期大学部教授の小泉凡さん(54)が講演する。

前売り券は一般2千円、高校生以下1千円。問い合わせは松江市観光文化課、電話0852（55）5214。

（和田守涼平）

平成27年12月9日付け・山陰中央新報

～第6話～ 八雲の聴いた音楽

小泉八雲 育んだ国

アイルランド訪問記

＜川島典子＞

教会、街角 あふれる音色

荘厳なパイプオルガンの音が、ホーリー・クロス・チャーチに響きわたる。

同チャーチは、小泉八雲庭園があるウォーターフォード県トラモアのカトリック教会だ。

アイルランド国民の約85%は、カトリック教徒。この教会の墓地には、八雲を育てた大叔母サラ・ブレナンの墓がある。

10月11日午前、同教会で松江市総合文化センタープラバホール専属オルガニストの米山麻美さんによるパイプオルガンリサイタルが開催された。

（上）パイプオルガンリサイタルが開かれたトラモアのホーリー・クロス・チャーチ（下）同チャーチ前にある八雲の大叔母サラ・ブレナンの墓（ともに筆者撮影）

トラモア初のパイプオルガン演奏会には、町民ら約150人が参加。子どもたちと共にやってきた家族連れもいた。

米山さんは、「聖母マリアの讃歌」や、「フーガ」（M・デュリュフレ作曲）、八雲の幸せな結婚生活をイメージした「トロルド・ハウゲンの結婚の日」（E・グリーグ作曲）、「赤とんぼ」（山田耕筰作曲）、アイルランド民謡「春の日の花と輝く」など、全7曲を八雲の魂の飛翔を願って弾いた。

「春の日の花と輝く」では、女性指揮者のポーラ・ゴードンさん(79)が、若々しい澄んだ声で独唱。その後、平均年齢70歳から80歳の地元女性13人による聖歌隊が合唱し、最後は観衆も加わって全員で歌った。

八雲が毎夏トラモアの海で泳いだころ、ホーリー・クロス・チャーチは建設中だった。だが、敬虔なクリスチャンの大叔母に育てられた彼は、パイプオルガンの音を聴いていたにちがいない。大叔母のサラ・ブレナンは八雲をカトリックの神父にしようと考えていた。

パイプオルガンは、中2階に設えてある。オルガンの音は、神に届きそうなほどに高いチャーチの天井に反響しながら階下におりてきた。

一番後ろの席で聴いていた筆者は、演奏開始後わずか5分で泣いてしまい、号泣。筆者は、今年2月に父を亡くしている。

反目しあった父だったが、失ってみると良い思い出しか残らない。人は死んだらどこへ行くのだろうか？米山さんの奏でるパイプオルガンの音を聴きながら、そんなことを考えていた。

歴史を感じさせる教会の神聖な雰囲気や、集まった観衆が醸し出す熱気があいまって感極まり、涙は、とめどなく流れた。

実は、教会の古いオルガンは機能の一部が壊れていた。米山さんは、演奏会前日にその事実を知る。曲目構成を変えようかと悩んだ米山さん。アシスタントに手伝ってもらうことで苦境を乗り越えた。「神様から与えられた能力を信じて、アクシデントも大いなる贈物だと思い、演奏しました」と米山さんは言う。

地元の人たちも涙を流しながら聴いていた。

階下から立ちのぼる温かい気は、上で演奏する米山さんにも伝わっていたという。

理屈では説明できない感動の共有が、そこにはあった。

この日、米山さんが演奏した「聖母マリアの讃歌」は、19日午後3時から、プラバホールで開かれるクリスマスコンサートでも奏でられる予定だ。

アイルランドの街角では、音楽が絶えず間なく流れている。人々は、毎夜のようにパブでギネスビールを飲み、アイルランド音楽に興じていた。

ティン・ホィッスルと呼ばれるリコーダーのような縦笛や、牛などの革の袋を肘で押して演奏するバグパイプみたいなイーリアンパイプス、ヤギの革で作った片面太鼓・バウロン、八角形の手風琴・コンサーティナ、フィドル（バイオリン）など、さまざまな民族楽器が奏でられる。

アイリッシュ独特の軽快なリズムによるダンス音楽と、特定の音階のみで創りだされる哀しみをふくんだ調べを、子どものころの八雲も聴いたのだろうか。

実際、アイリッシュハープの伴奏でアイルランド民謡「春の日の花と輝く」をコングに住んでいた伯母のキャサリン・エルウッドが歌っていたのを、八雲は覚えていたのではないかという説もある。

八雲が聴いた「春の日の花と輝く」の話は、「朗読の夕べ～稀人（まろうど）～」で朗読される回想録「ひまわり」（怪談）にも登場する。

松江市出身の俳優・佐野史郎さん(60)とギタリストの山本恭司さん(59)による八雲作品の「朗読の夕べ」も、明日13日午後6時半よりプラバホールで開催される。

朗読の前には、小泉凡さん(54)が、構成作品に関する解説を行う。山本さんのエレキギターによって、「春の日の花と輝く」のメロディーも奏でられる。

アイルランドの3都市で好評を博した「朗読の夕べ」が、松江で再演されるのは楽しみだ。

八雲の書いた作品や、彼が聴いたアイルランド民謡が、時空を超え国境を超えて奏でられる感動をぜひ味わっていただきたい。

（松江総合医療専門学校非常勤講師）

＝土曜日付で掲載＝

平成 27 年 12 月 12 日付け・山陰中央新報

朗読とギターの息のあったコンビで八雲の作品の魅力を伝える佐野史郎さん（左）と山本恭司さん（松江市提供）

松江

八雲の幻想的世界広がる

佐野史郎さん、山本恭司さん

朗読ライブで7作品を披露

松江ゆかりの文豪・小泉八雲（1850～1904年）の魅力を伝える朗読ライブ「神人～彼方より訪れしもの」が13日、松江市西津田6丁目のプラバホールであった。同市出身の俳優佐野史郎さん(60)とギタリストの山本恭司さん(59)が競演。独特の情感あふれる表現に、エレキギターの響きがマッチして生み出すライブが相乗効果となって、約500人の観客を幻想的な世界に引き込んだ。（古和隆宏）

ステージで2人は、アイルランドの妖精にまつわる思い出をつづった「ひまわり」や、顔のない妖怪を扱った「むじな」など7作品を披露。

「むじな」では、佐野さんが真夜中の道ばたで妖怪と出くわした男の驚いた様子を、「わっ！」と大きな声で表現し、走って逃げた後、「はあ～はあ～」と肩で息をする男をジェスチャーを交えつつ披露。山本さんは男が走って逃げる足音をギターをかき鳴らして盛り上げるなど、息の合ったステージで、観客は息をのんで見入っていた。

夫婦で訪れた松江市内中原町の会社員、松浦美佳さん(44)は「圧倒的な迫力で臨場感をひしひしと感じた」と話した。

八雲のひ孫で県立大学短期大学部教授の小泉凡さん(54)の講演もあり、八雲が幼少期を過ごしたアイルランドで10月、初開催された八雲顕彰イベントに参加したことを踏まえ、八雲の同国での経験が、その後の日本の精神を理解する土台となったとした。

平成 27 年 12 月 15 日付け・山陰中央新報

若者目線で魅力発信へ

島根大、県立大短大部学生

堀川遊覧船サークル発足

堀川遊覧船の乗り場で談笑する学生＝松江市黒田町、松江堀川ふれあい広場乗船場

島根大と島根県立大短期大学部の学生が、松江市の城下町を巡る堀川遊覧船を通じて地域の歴史を学び、魅力を発信するサークル「みんなの堀川委員会」を発足させた。1997年に運航が始まった遊覧船に着目したサークルは初めてで、「若者目線で遊覧船の魅力を発掘したい」と意気込んでいる。

「船からの景色が良く、雨音も風情がある」。しとしとと雨が降った13日、学生たちは船頭の軽妙なトークに聞き入り、メモを取りながら景色を堪能した。学校周辺で過ごすことが多いといい、ほとんどが初めての乗船だった。

松江城が築かれた400年前の面影を残し、宍道湖から導水する堀川には、松江の歴史や自然が凝縮されている。遊覧船を運航する市観光振興公社の乙部明宏専務理事に「松江の良さを知らずに社会人になるのはもったいない」と促されたのが、サークル設立の引き金になった。

市外、県外出身の10人が賛同し、13日までに体験乗船。14日には松江歴史館（松江市殿町）に集まり、「若者が乗りたい堀川遊覧船」と題して話し合った。「狭い橋の下をくぐるのがスリルがある」と体験したばかりの魅力を語り、「遊覧船があるのは知っていたけど、一人で乗っていいのか分からない」と敷居の高さを挙げる声もあった。

2016年1月の次回会合は遊覧船に若者を引き付ける方策を考える予定だ。

委員長に就いた県立大短期大学部1年の葛西理世さん(19)＝高松市出身＝は「せっかく住むので、松江のことをもっと知りたい。友人に船の魅力を広めたい」と話している。（曽田元気）

平成 27 年 12 月 20 日付け・山陰中央新報